単元名　物語の裏舞台を探ろう『注文の多い料理店』

○山猫の注文を書くときの思いと紳士の言動を見た後の思い

	注文を書くときの思い	注文	紳士の言動から感じた思い
	・ガラス戸の表に金文字で書いておけば、きっとお金持ちの人たちが入って来るに違いない。あやしまずにどんな人でもいいから入ってほしいなあ。	①どなたもどうかお入りください。決してごえんりょはありません。（金文字）	・最近、やたら客が少ないのでだれでもよかったんだよな。これで俺たちの願いが達成できるかもしれないぞ。それにしてこの２人の紳士はすごい服装だな。しかしただでごちそうを食べられるなんてそんなはずあるはずがないじゃないか。ただで食べられるのならおれだって行きたいよ。都合のいいことばかり考える奴らだな。
	・こんなことを書くとすぐにばれてしまわないかなあ。太った人間のほうがいいけど。（金文字で書いてあるが、戸の裏側に書いてある）	②ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。（金文字）	・あやしまれずによかったなあ。脂ののった太ったしかも若い奴なんてめったにいないんだ。何と言っても俺たちの大好物なんだから。それなのに大喜びで入ってくるなんて、馬鹿な奴らだな。しかし１人の紳士がどうも変なうちだと言ったときはびっくりしたな。　あの紳士には要注意だな。
	・たくさんの注文があるから途中であやしまれるかもしれない。最初に断っておけば大丈夫だろう。それに注文が多いと書いておけば人気のある店と思ってくれるかもしれない。	③当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。（水色の戸黄な字）	・思った通りに注文が多いというのを人気があるんだと勘違いしてくれたぞ。俺たちがたくさん注文を出すのだとは知らずに。俺たち結構頭がいいのかも。それにたくさんの戸がロシア式なんて、これは山猫式っていうんだよ。知ったかぶりするんじゃないよ。しかし戸の上に書いてある事も読まずに入ろうとするなんて礼儀も知らないんだ　な。
	・もう一回確認しておこう。こらえてくださいと書いておくと我慢してくれるだろう。でもちょっとくどいかな。	④注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。（戸の裏側）	・あいつら注文にいちいち答えてくれるかな。入りたい、すわりたいって自分のしたいことばかり言っている。それの注文をうるさく感じているようだし、ちょっと心配だな。
	・できればきれいなものを食べたいな。きちんとしてくれると洗う手間だって省けるから。	⑤お客様がた、ここでかみをきちんとして、それからはき物のどろを落としてください。（赤い字）	・きれいにしてくれたぞ。これでおいしく食べられるな。でもブラシやくつが消えたのはやばかったな。ちょっと怖がったかもしれないぞ。最後まで来てくれよ。
	・もし鉄砲を持っていたら大変だ。武器を持たなければ自分たちが危ない目にあうこともない。打たれたら	⑥鉄ぽうとたまをここへ置いてください。	・別に偉い人が来ているわけじゃないんだけど。２人は偉い人がよほど好きなんだな。

	たまらないもんな。洋服よりも武器が先。絶対に置いてくれよ。	（戸の内側）	
	・おれたち、人間の服を脱がせることができないから自分たちで脱いできてくれよ。食べるためには身につけているものはじゃまだもんな。	⑦どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。 （黒い戸）	・別に偉い人とは関係ないのに。本当に偉い人が好きなんだな。人間手欲張りなのかも。
	・鉄砲だけが危ないんじゃなかったな。とがったものは武器にもなるし、食べている途中でのどに引っかかるかもしれない。おっと忘れるところだった。でもここまでいうとあやしまれると思うけど。うまくいきますように。	⑧ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。 （戸の裏側）	・この山の中に電気なんてあるわけないだろ。馬鹿な奴らだ。食べやすくするためなんだよ。しかしここまでよく信じて来てくれたよな。
	・さあいよいよ味付けだけど、これからがやばいな。ばれないようにしなくちゃ。しかし牛乳のクリーム味の料理。早く食べたいなあ。	⑨つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。	・こんな山奥に貴族なんて来やしないさ。ひびがきれる心配なんていらないよ。ぼくたちがおいしく食べられるように味付けしてるんだから。本当に偉い人偉い人ってうるさい奴らだな。こっそり顔へぬるなんてけちな奴ら。自分だけいい思いをしようとしているんだ。
	・ここまで書いたらあやしまれるかもしれない。でもおいしく食べるためには隅々まで味付けができていないといけない。よくぬってくれよ。	⑩クリームはよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。（裏側） （すぐ前）	・こっそり顔だけにぬっちゃって。耳は骨がなくて一番うまいんだよ。あのゼラチン質がたまらないんだ。おいしい料理を食べるためには細かいところまで気をつけるんだよ。なんだかほめられているみたい。
	・たくさんの注文に飽き飽きしているかもしれないので、ここでもうすぐだよって書いておこう。本当にもうすぐなんだけど。金ぴかの香水に瓶に入れていればきっと酢だってふりかけてくれるさ。	⑪料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。	・まちがえたんじゃないよ。酢で味付けする方がおいしいのさ。しかし酢を頭にふりかけるなんて馬鹿じゃないか。よほど食いしん坊なんだ。
	・体中に塩をもみ込んでくださいなんて書くとばれちゃうかも。でも最後に注文なんだ。何とかならないかな。ここで答えてくれればおいしい料理が食べられる。頼むよ。	⑫いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうか体じゅうに、つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。 （戸の裏側に大きな文字）	・さすがにばれちゃったな。でも戸は動かないし外へは出られない。もう一枚の戸を開けてくれればこっちのもんだ。ここまで味付けしたんだから何としても食べたいな。

１単位時間の展開の留意点
（１）書く活動について（リライト）
〇注文を書くときの思い
・その注文のことばから想像しながら書く。（レベル１）
・前の注文とのつながりを考えながら書く。（レベル２）
・レベル２＋日常生活の調理と関連させて書く。（レベル３）
〇注文後の思い
・紳士の言動をもとに考える。（レベル１）
・注文を書いたときの思いと比べながら書く。（レベル２）
・前の注文後の言動と比べながら書く。（レベル３）

単元での読みの力の段階的な伸びについて
〇１～４の注文では
・注文を書くときの思いは、想像を中心に考える。
　レベル１・・・ことばからの想像のみで書く。
・注文後の思いは紳士の言動から読み取る。
　レベル１・・・紳士のそのときの言動から考えて書く。
〇５～８の注文では
・注文を書くときの思いは、前の注文とのつながりを考えながら書く。（レベル２）
・注文後の思いは注文を書いた問いの思いと比べながら書く。（レベル２）
〇９～１２の注文では
・注文を書くときの思いは、日常生活の調理と関連させて書く。→ここから味付けになるから考えやすい（レベル３）
・注文後の思いは、前の注文後の紳士の言動と比べながら書く。（レベル３）

（２）グループ間討議
・担当グループの案をもとに話し合う。レベルを意識した発言から子どもたちなりの読みへと写していく。

（３）物語創作
・１時間の終末に裏話を加えたものを読ませ、次時の意欲付けにしていく。